

## 「できるタイプ」の典型 部下や顧客先も信頼し

地方都市にある食品加工工場製造部門の責任者、50代前半のTさん。いずれは工場長に、という声も聞こえる人材で、やや高圧的なタイプだったが、工場内では「できる人間」という評判で、部下からの信頼も厚かった、と自ら口に出した。一方で、ポツリ「パワーハラと言われても仕方がないような言動はありましたね。まあ性分ですから変えられませんでした」と語り、この時は「できる人間」に見られる積極性は消えていた。やはり、相談理由の内容がよほど堪えているのだろう。視線を合わせることも避け、下を見つめながら話す場面が多かった。

相談理由とは：自らの行動が原因となったパチンコ依存と家庭破壊。双方が絡み合っていてどちらが中心と絞ることはできなかった。やがて、Tさんの妻と社会人として独立した一人っ子の長男にも関わっていくことになったが、ひとつの家族が、あたかも木片が破碎されていくようにつぶれていく過程を目にして、いたたまれない気

# パチンコ依存

第14回

新 相談現場からの報告

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

## 仕事評価され順風のはずが 妻子は不満を募らせていた

持ちにもなった。

Tさんは、大卒で、本社に入社時は商品開発に携わった。試供品作り、既成の商品の品質向上を数人の仲間と担当。試供品が本場に市場に出せるかどうか、まず社内の人メンバ、特に女性社員、パートの女性契約社員に試食してもらった。加えて営業スタッフを通して、顧客先の意見を聞くこともルーティ化した。これは顧客先からも歓迎され、売り上げ拡大につながった。

### 会社のトップの世話で 出世考えて見合結婚し

次々とアイデアを出し、精力的に活動する姿に社員は信頼し、Tさんも自信と誇りを持って業務に励んだ。もちろん小さな失敗はあったが、社内の評価はいつも上位で、同期入社でもトップでリーダー職になった。会社にとって貴重な存在になったTさんは、30代になって主要な生産拠点である現在の工場にマネジャーとして異動した。本社の人事考課でいえば課長級で抜擢人事だった。その際、会社トップの世話で結婚というおまけまでついた。女性の友達がいな

かったわけではないが、仕事に追われて恋人と呼べる相手は作れなかった。

簡単な見合いをしたが、この話を断つては自分の出世に響くだろうと考えて結婚を決めた。後で「あの時の考えが間違っていたんでしょいかね」ともらしたが、聴くだけで反応することは避けた。

妻となつた相手はサラリーマン家庭。二人の兄がいたためか、兄弟喧嘩も負けまいと、強情張りの一面があった。都会育ちだったせいか、結婚と同時に地方都市で暮らすことになることを、いい体験と受け入れてはくれたが、3年程度で戻れると思込んでいた。人事異動はどの会社でもあることなので、Tさん自身も長く同じ部署での仕事になることは予想していなかった。本社でさらに重要なポストにつくまでのひとつのステップと考えていた。

## 製造現場で充実の日々 妻は地方暮らしを嫌悪

もつとも、Tさんの関心事は、働く場所ではなく、何をやるのかにあった。品質改良も含めた製造の第一線での仕事は大歓迎。しか

も自分の思い通りに部下を使えることも、人前に出たがる性格に合致していた。大げさに言えば、次第に定年までここでいいという考えにもなつていった。そんな思いが上司にも本社にも届いたのか、実際に異動の話はないまま工場勤務が続いた。

一方、やっぱりと云うべきか、妻は慣れない地方暮らしで、気軽に話し合える友人もいないため、イライラ感を強めていった。特に社宅住まいは受け入れられなかった。夫つまりTさんは、月に一度は本社に泊りがけの出張があった。本社と工場は、日帰りも可能な距離だったが、仕事の報告が終わった後の懇親会という名の「ちよつと一杯」が魅力だった。

しかし、妻には息抜きの場はない。出張から帰宅する度に「あなたはいいわね。好き勝手に出かけられて」と、半ば八つ当たり気味に夫を責めた。「時々は実家に帰つてもいいよ」と妻に言っただければよいかな、と思つても、実際に声をかけることはしなかった。「妻は夫に仕えるべき」という考えに支配されていた。それが古風

な考えと分かっているとしても、自分の信念として変えることはできなかった。自分の父親もそうでしたから、と話したこともあった。

## 妻の愚痴、怒りから逃れ 元々競馬などが好きで

3年が経過し男の子が誕生した。異動の話は当分出そうもないな、と考えた時、子育てのためにもと、マイホームを購入した。住宅ローンの負担も都会よりは少なかったことも決断させた。社宅住まいを嫌っていた妻も反対はしなかった。Tさんは、せめてもの優しさをと、思い、間取りは妻の意見をかなり取り入れた。

新築当初こそ、夫婦間の波風は収まっていたが、所詮は理解し合うという根っここの部分が解決したわけではなく、次第に妻の愚痴、怒りが増していった。忙しさを理由に、Tさんは子育てを手伝うことが少なかったことも、妻の攻撃的な態度に輪をかけた。

妻を避けるためにTさんが逃げた場所は：地方都市でも主要道路沿いに並んでいるパチンコ店だった。元々競輪や競馬、競艇好きで、都会では休日ごとに通っていた。

気晴らしの域を出なかつたので、小遣いの範囲での遊びのつもりだったが、イチかバチか、何かに賭ける気持ちと行為は、大当たりする新商品開発とつながっている、というのがTさん流の考えだった。ギャンブルはその場にいけないれば勝負にならない、とも考え、地方でかなえられるのはパチンコだった。

## 出世し自由になる時間 家庭無視してホールへ

最初の内こそ、休日に限られていたが、ポストが上がるにつれて、多忙の中にも時間を自由に使える裁量の幅が大きくなり、平日のパチンコ店通いも増えていった。40代中ごろが一番多かったと述べた。仕事をバリバリにこなす一方で、自分の独断で勤務時間も自由にできたのは、地方の工場だったからとTさんは思っていた。ただ、依存状態になるほど通いつめた本当の理由は、負け続きで、何とか金を取り戻そうという焦りから生まれたものだった。

一人っ子の長男は中学から高校へ。大事な時期だったが、父親としての役割は果たしていない。高校選びも本人の希望通り、あとは

妻任せ。長男も、ほとんど家にいない父親を無視するかのようになり、たまに一緒になっても会話はなかった。大学進学も何とか家から通学できる地方の学校を選んだ。

これも後日分かったことだが、長男は、進学で家を出てしまった場合、母親がひとりになることを心配していた。病気になるかもしれない。あるいは夫婦喧嘩が激しくなると事件を起こすかもしれない、ということまで恐れていた。高校生の目から見ても、それだけ夫婦の関係は冷え切っていた。

### 妻に渡す金額だけはと消費者金融にはまって

口うるさい妻と一緒にいたくない、という動機で始まったTさんのパチンコ通いだだったが、時間つぶしは、次第に消費が増え、負けず嫌いの性格が勝負に出て、さらに店通いが増える悪循環に陥っていった。

Tさんは、結婚当初から生活費は現金で妻に手渡すやり方を取っていた。金額そのものは、子どもの教育費、妻自身の小遣いも含め、十分な額のはずだったという。給料が振り込まれる預金通帳は自分

が管理。従ってパチンコ代も自由な配当できた。

地方都市では余裕のある給料だったが、貯金がどんどん減っていった。焦りが焦りを呼び、出費を減らすためにパチンコ通いを少なくすることも、思っただけで行動は逆に増えていった。妻に渡す金額だけは維持しなければいけないという。大人の考えは消えていかなかった。

その結果頼ったのは消費者金融。「まあ、数年はもったでしょうかね」と自嘲気味に振り返ったが、パチンコ依存者が陥るアリ地獄のような穴倉にTさんも入りこんでいった。ひとつの金融会社で済むわけはなかった。借金が2百万、3百万と増えていった時、さすがにTさんも、とんでもないことになっていて自覚した。自分の愚かさに気づき始めていた。

### 住宅手放す崖っぷちに工場長も妻も疑いの目

職場には隠していたはずだが、工場長からは、「どうした。生気がないぞ。君らしくない。何かあったのか」と言われた。本当のことは言えず、「女房の体調が悪くなっ

て」などとその場しのぎに返事をしていた。しかし、唯一の上司である工場長の言葉はこたえた。

何とかしなければ、という思いを決定づけた展開になった。貯金が底をついた結果、自動引き落としされている住宅ローンが払えなくなった。契約上、住宅を手放さなければいけないという崖っぷちに追い込まれた。防ぐ手だてはなかった。妻に対して、何事もなかったように振る舞うことはできなかったが、どんなふうにも切り出せばいいか分からなかった。とにかくパチンコ通いはやめる決心をした。当然出費は減ったが、給料の

行く先は消費者金融への支払いが中心で、やりくりには限度があった。実は、妻も夫の行動に強い疑念を感じていた。複数の金融会社からの手紙、住宅ローン支払先の銀行からの手紙が急激に増えたことに「何かあるな」と直感した。しかし、夫婦間はすっかり冷え切っていたので問いかけることはしなかった。夫なんかどうなってもいい、という考えは変わらなかった。

### 告白し必死に謝ったが「嫌です。別れましょう」

息子も大学3年生になり、就職先を考える時期になっていた。妻は息子に「自分の道を進んでいいよ。家から離れても母さんは大丈夫だから」と話していた。息子が不在のある晩、Tさんは妻に土下座するように頭を下げて、事実を告白した。「いつときこの家を出なければいけなくなると消え入りそうな言葉で告げた。直後の会話は次のような流れだった。「いつときどうい



う意味？」

「しばらくしたらまた戻れるようにするから。信じてほしい。実は…」

「聞きたくないわ。言い訳なんか」

「言い訳なんかじゃない。申し訳ないことをしてしまいました。しかし…」

「もうやめて。で、いつが期限なの？この家は」

「1か月は待ってもらった。社宅は空いている」

「冗談じゃないわよ。社宅なんかもう二度と住みたくないから。分かるでしょ。こっちの気持ち」

この時、息子が帰宅し台所から両親の会話を耳にしていた。

「気持ち分かるが、家賃を考えれば社宅しかない」

「嫌です。別れましょう」

「えっ」

「離婚よ。もう一緒に住むなんて考えられませんから」

## 「もうごりごりだよ」と泣き崩れる息子の姿に

こうして実にあっけなく夫婦関係は断ち切られた。Tさんが取りつく島もなく茫然としている時、息子がドアを開けて入って来た。

「親父、おれは母さんに賛成する。工場では威張っているかもしれない

いけれど、母さんが可哀想だ。もうごりごりだから。親父って言うてしまったけれど、初めてだな。この言葉を使ったのは」と言って泣き崩れた。この時は、Tさんも涙を抑えることができなかった。妻も何とかこらえていたが、床に倒れ込んで泣いている息子の姿を目にして、込みあげる涙を流すにまかせた。

## 投げやりにはならないだが寂しい一人住まい

2週間後、Tさんは社宅で一人住まいを始めた。独身向けではなかったが、特別に認めてもらった。恥ずかしくて住めないと思いつつ、それ以外の方法は浮かばなかった。マイホームを失い、家族とも離別し、炊事、掃除の経験もない50男の今後の人生は、相談を受けてもすぐには妙案はなく、自分で解決していかなければいけない。分別まで失ったわけではない。言われなくても分かっていることと思いつつ、当面は地道に工場の仕事をしたいくしかないでしょう、と語りかけた。「どうやら工場長の芽はなさそうです。雰囲気から」とTさんは独り言のようにつぶやいた。

た。何も答えないで、ただうなずいた。先のことは分からないが、投げやりにはなっていないことを感じた。「奥さんと息子さんに会いたいとは思いませんかという質問に、「連絡を取っても返事がありません。仕方ないです。諦めてはいませんが、お願いがあります。息子と会ってくれませんか。就職したらしいことを聞きましたから」と語った。

## 就職し母と暮らす息子「母も私ももう会わない」

長男はその後、IT系企業に就職、地元にある支社に配属された。赴任地は自分から希望したわけではなかったが、運よく当面は母と一緒に暮らすことになった。試用期間が過ぎた時期に電話で話した。面会は遠慮したいという返事だった。

電話での話し合いを通して、両親が離婚してからの様子が分かった。あの後、妻と長男は、工場からも社宅からも離れたアパートに引っ越した。妻はスーパーで働き始めた。生活費を切り詰めてきたので多少の貯金はあった。息子が就職するまでの間は何とかなる。

しかし、これからは、息子にも迷惑をかけないよう、ひとりて生きていかなければいけない。年金をもらえるのはまだ先のこと。自立していかなければいけない。40代後半に至って、働いた経験のない妻にとっては覚悟の生活設計だった。息子が無事就職できたことを、「神様は見放さなかった」と喜んでいるといふ。

父さんとは？と問いかけたところ、即座に「母も自分も、もう会わないと思います。ひどい夫であり父でした」と答えた。話ができなかったことにお礼を言って電話を切った。Tさんの顔が浮かんだ。こわもて、親分肌の「強いリーダー」の顔と、家族と別れて途方に暮れる「ふがいない父親」の顔。どちらも人間Tさんだが、自分が蒔いた種、という平凡な言葉しか出てこなかった。

### 柏木勇一(かしばぎ ゆういち)

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業(Employee Assistance Program)でカウンセラー及び研修講師として活動。厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士